

「東中生徒アンケート」の とりくみから学んだこと ～「まつだシート」をきっかけに～

余市町立東中学校
太田 政裕

1. はじめに

後志支部は、2012年度の全道事務研にて、余市町教育研究会学校事務部会（以下部会）が連携してとりくんだ「子どもアンケート」について報告した。私は2013年より現在まで、この部会に所属しており、連携したとりくみは2016年まで継続されてきた。

さて、今回の報告は、私自身が2013年度から現在までとりくんできている「東中生徒アンケート」（以下アンケート）をふりかえることで自身が学んだこと、それによる波及効果について報告する。ふりかえるにあたっては、「まつだシート」を使用した。

2. 部会での「子どもアンケート」のとりくみ

部会では、2011年に「学校間連携の具体化をめざして」という研究主題のもと、学校事務職員が配置されている小学校3校と中学校3校の計6校で「子どもアンケート」にとりくんだ。

初年度のとりくみの反省から、次年度への方向性について検討した結果、全校（6校）でとりくめたこと、校内での反応も良く、継続してとりくみやすい、との理由から次年度以降も全校（6校）でとりくむこととなった。

連携したとりくみとして、2016年までの6年間継続されてきた。

3. 「東中生徒アンケート」のとりくみ内容と考え方について

ここで、東中学校でとりくんでいるアンケートについて説明する。

- (1) 実施学年は全学年
- (2) アンケート項目は部会で共通した次の3項目となっている。
 - ①「こんなものがあったら、学校生活がもっと充実する」
 - ②「学校で直す必要があると思う場所や物、不

便なこと、困っていること」

③「東中の良いところやすきなところ」

なお、表現方法などは各学校で工夫して良いことと確認されている。

(3) アンケートの説明及び配布については学級担任に依頼する。

(4) アンケート用紙への記入は、休み時間や放課後等（自宅持ち帰り可）に行い、無記名とする。

(5) 回収については、所定の場所に設置する回収箱による。

アンケートについて、私は、①あくまで“アンケート”であるので、任意で協力していただくもの、②回収率は重要、と考えている。よって、①でいえば、回収方法については回収箱を設置するが、方法については各担任に任せている。②については、「アンケートを出さないということは、特に不満もないという見方もできるが、回収率が低いとアンケートに対する関心も低いと考えられること」、さらに、「ある程度の数が集まった方が、生徒の意見としてまとまりがあり、予算要望に対する生徒の意見として活用するときに、説得力が増すのではないかと考えていること」からであり、回収率については気にかけている。

4. 「まつだシート」とは

2014年度のブロック研修において、過去にブロックで使用していた実践報告用の様式を改良し再活用するとりくみを行った。改良後の様式は、当時のブロック研修担当理事にちなみ「まつだシート」という愛称がつけられ現在に至っている。このシートには、「大幅な世代交代期に、これまで諸先輩方が積み上げてきたものを継承していくため」、「とりくみを記録としてまとめることで、経験年数が少ない方にもわかりやすく」また、「形に残すことで、後で誰かが見たときに『自分もやってみよう』と思うきっかけにもなるのではないか」という研修担当理事の思いが込められている。

このシートは、とりくみが整理しやすく、かつ、わかりやすいとのことから、2014年度以降のブロック研修会でも、とりくみ報告時には、引き続き使用されている。私も、自身がとりくんだアンケートについて「まつだシート」を使って整理し、その結果をブロック研修で報告

したことが今回の報告をするきっかけの一つになっている。

5. 「まつだシート」でふりかえるアンケートのとりくみ

では、アンケートについて、自身がとりくみできたその内容と経過を「まつだシート」により、2013年度から年度ごとに振り返ってみる。

(1)2013年度 (1年目)

アンケートは、職員会議で提案後、実施した。

予想していたよりもスムーズに実施することができた。その要因は、余市町教育研究会長から協力依頼文書の各学校送付と、町内全事務職員がやるという姿勢だと感じている。

アンケートの集約の結果については職員会議にて検討し、町教委への予算要望書に生徒の意見として載せることができた。

また、アンケートの結果について、当初は壁新聞などを通して生徒に知らせようと考えていたがそこまでには至らなかった。

アンケートを実施し、予算要望に結びつけることまではできた。しかし町教委との予算のヒアリングの際に、要望事項が改善されない又は改善される見通しが薄いことが感じられた。このことが結果を生徒に知らせにくくしている要因であった。

アンケートは実施したものの、自分の中での子どもアンケートに対する意義や目的を、明確に意識してとりくめていなかったために、中途半端なとりくみになってしまったのではないかと反省している。

アンケートを取るまではいいが、それをどのように生かせるのかが課題となった。

(2)2014年度 (2年目)

昨年度の反省を踏まえてアンケートの実施時期を早めて行った。昨年は8月29日～9月6日の日程でアンケートを実施した。この日程だと町への予算要望書の提出が例年10月となっており、アンケートを集約・分析し、職員会議に通すには非常に慌ただしい作業日程になる。そのようなことから、実施期日を7月7日～7月15日とし、6月の職員会議にてアンケートを提案した。

アンケートの提案と実施時期を早めたのは、

町教委への予算要望書作成の関係から日程的に余裕ができ、正解だったと感じている。

反省事項としては、壊れている場所があることはわかっても、その箇所を特定しにくかったことが挙げられる。アンケートの記入方法について、改善の余地が残った。

また昨年度の懸念事項として残っていた、アンケートに対する実現度合を含む結果の報告については、予定していた壁新聞を作成することとし、昨年度分の結果を壁新聞として職員室前に掲示した。

(3)2015年度 (3年目)

昨年度の反省から、アンケート項目2番目の質問に『(壊れている場所は具体的にわかるように記入してください)』という文言を加えた。そのことにより細かく記載してくれるようになり、これによって軽微な修理については即座に対応可能となった。

アンケート集計項目が増えたが、効果は非常に大きいと感じた。

昨年度のアンケートに対する実現度合を含む結果について壁新聞を作成し、今年度のアンケートの宣伝ポスターとともに職員室前のフロアに掲示した。

反省点としては、アンケートの宣伝ポスターを作成し工夫してみたものの、アンケートの回収率が、初年度の回収率73%に比べて、41%と非常に低い数値となってしまったことである。

この要因として考えられるのは、この年度は教職員の異動がなかったこともあり、職員会議の提案を簡単に済ませてしまったことにあると思われる。

(4)2016年度 (4年目)

今までの反省を踏まえ、「10月に提出する予算要望書に生かすためのスケジュールの確立」と、「アンケートの回収率が下がってきていること」の2点を課題として重点的にとりくみを行った。

6月の職員会議では、次の3点について重点的に説明し、アンケートの協力を要請した。

- ・ アンケートの回収率が下がってきていることについて
- ・ 生徒が自分たちの生活の場として意識的

に考えることを大事にしたい

- ・ 学校予算要望に向けて生徒からの意見を予算要望に反映していきたい

今回実施した生徒アンケートでは、回収率が72%までになった。

回収箱を各階フロアに設置しているが、担任によっては一斉記入の時間設定や、一括回収後に持参してくれるなどの工夫をしてくれた学級もあった。

アンケートの回答内容にも昨年と違いがでてきており、現実的なものが増えてきている。

また、一つの質問に対して、複数の回答を記入する生徒が多くなった。その内容には切実な問題が多く、真剣に考えて答えてくれている姿勢が伺えた。

今年度は、10月の学校祭時期に間に合うように早めに集約を行って壁新聞を作成し、職員室前に掲示した。保護者や来賓来客など、多くの方々にアンケートの内容を見てもらうために、この時期に間に合うように調整した。

また、体育館の耐震工事が入った関係で、バスケットゴールが新しくなり自動化になった。これはアンケートの要望の上位にもあったことから、東中生徒アンケートの速報を作成し、壁新聞の横に掲示した。

アンケートと町教委への予算要望の関わりについて、今年度集約したアンケートについては、回収率も高くなったことと、内容自体も生徒の切実さが伝わってくるものであったため、「東中生徒の生の声」ということで、集約結果表をそのまま予算要望書に添付して、町教委へ提出することを職員会議で提案し、確認のうえ提出することとなった。

(5)2017年度 (5年目)

今年度、部会での「子どもアンケート」のとりくみは終了することとなったが、本校では引き続きアンケートを実施することとし、例年通りの形で行った。

アンケートの回収率は本校でとりくんだ中で一番高い91%となった。その要因は職員会議にて丁寧に説明し、協力を要請したことだと思われる。

6学級中5学級の担任が、直接にアンケート

を回収し持ってきてくれた。学級分の回収や、一斉に記入する時間を設けるなど、非常に協力的で感謝した。

アンケートの集計作業では今まで学年別に集計していたものを、学級別で集計するように変更した。これにより場所の特定や回答の偏りがわかりやすくなった。

アンケートの結果の壁新聞についても昨年同様に、できるだけ多くの方に見てもらえるように、10月の学校祭に間に合うように作成している。

年度末反省にて、「部会でのアンケートのとりくみは、今年度で終了したが、本校では引き続き行っていく。」との意思表示をし、次年度の学校事務運営計画に「アンケート」について記載することを職員全体に説明した。

6. 「まつだシート」で明らかになったこと

子どもアンケートの実施をふりかえって、「学校間連携」と「学校事務運営計画」との関連について明らかになったことを、それぞれ記載する。

(1)学校間連携としての「子どもアンケート」のとりくみについての考え方

子どもアンケートのとりくみについては、敷居が高く感じられ、また懸念される問題もあったことから、なかなか踏み出せない状況にあった。しかし、部会にて、全学校でとりくみを行おうという姿勢からの連帯感や使命感により、子どもアンケートを実施することができた。余市町の全学校でとりくみを行っていることから、2011年から引き続き行っていることから、学校内にも子どもアンケートが定着してきているように感じられ、スムーズな実施につながったと考えている。

また、余市町では人事異動により1校の小学校に期限付の事務職員が採用された年度があり、その方は学校事務未経験者であったため、その年度の子どもアンケートの全校実施については無理かと思われた。

しかし、今までのとりくみの積み重ねと、その学校のしっかりと引き継ぎもあり、その年度についても6校で子どもアンケートを実施することができた。

連携により全員でとりくむということは、初

めて子どもアンケートを実施する事務職員にとっても、背中を後押しする非常に大きな力になるのではないかと感じている。

部会では子どもアンケート実施後に「アンケート実施に関わっての結果の交流」を行ってきた。内容としては、各校共通のアンケートシートと、アンケートの集計表や各校それぞれの児童生徒への提示方法などの交流である。

特にアンケートの提示方法については部会では統一してはいないので、「じむだより」を発行する学校や、壁新聞形式で掲示する学校など、独自性がありとても参考になるものであった。

財政財務活動である予算要望活動について、部会では例年各学校の予算要望の内容と、ヒアリングの結果についての交流を行っている。

一つの例として、複数の学校で網戸が設置されていないことが明らかになるなど、町内の学校に共通する課題を見つける糸口として、アンケートの交流による各校の実態把握は有用である。

連携してとりくむことにより、単独実施では気づきにくい、町内各校の共通課題を洗い出すことができることがわかった。

(2) 学校事務運営計画とアンケートについての考え方

本校の学校事務運営計画には、アンケートについての記載はしておらず、職員会議で提案することによって、アンケートのとりくみを行ってきた。

職員会議の提案文書には「余教研事務部会では『学校間連携』の具体化をめざして」という研究テーマで、町内の小中学校で「子どもアンケート」のとりくみを行っています。今年度は何年目の実施となります。」という文面を載せ、「余市町の学校事務職員はみんなでこのような活動をしています」、ということを職員会議で説明してきた。

学校事務運営計画への記載については以前から考えてはいたが、2017年度から部会で全校でのとりくみを終了したことをきっかけとして、2018年度の学校事務運営計画に記載することとした。

合わせて、「予算要望に関わる生徒アンケー

ト及び予算要望書校内集約の流れ」というスケジュール表も運営計画に載せることとした。アンケートの実施案とその集計報告、町教委への予算要望書の作成とアンケートからの意見反映などを全て職員会議で提案・説明してすすめられるようにするために、予算要望書提出期限から逆算して組んだスケジュールである。これは、過去4年間のとりくみとその反省があったからこそ見えてきたことである。

職員会議の議題数の多さから提案をためられる時もあるが、朝の打ち合わせや文書配布だけではなく、職員会議での提案ということにこだわりをもちたいと思っている。それは忙しい中でも対話というのが重要なことだと感じているからである。

2018年度の学校事務運営計画にアンケートについて記載する際に躊躇したのが、アンケートのとりくみが、財政・財務活動なのか、学校事務情報活動なのか、どちらに記載すべきなのかということであった。

年度末反省にて、次年度の学校事務運営計画にアンケートについて記載することを職員全体に説明したものの、どのように記載すればよいか思案していたが、アンケートのねらいと本校の学校事務運営計画との関連性を考え、財政・財務活動と学校事務情報活動の両方に記載することとした。

7. アンケートのとりくみから

(1) とりくむことの重要性を実感した！

2013年に私が部会に所属した時は、前年度の研修の流れから、引き続きアンケートを全学校で実施することになっていたが、それまで「子どもアンケート」にはとりくんだことがなかった。過去に2回ほど機会はあったが、そのときは主に下記の3点の理由により、実施に踏み切ることができなかった。

- ① アンケートを行って子どもの要望がなかったとしても、予算の裏付けや環境により、応えることができる自信がない。
- ② とりくみは、自分以外にも関わってくる教職員が多いために、学校内が行事等で多忙な中で、教員に負担を更にかけてそうで頼みにくいことから躊躇していた。
- ③ 「子どもアンケート」を実施する意義が自

分の中で明確になっていない。

以上のことから「子どもアンケート」について、今まで積極的に推進していく考えではなかった。

しかし、実際にアンケートにとりくんでみたところ、想像していたよりもスムーズに実施することができた。これは、私にとって初めてのとりくみではあったが、本校では2年前からのとりくみによりアンケートが周囲に定着しはじめていたことと、町内全校(6校)で行うことが非常に大きな後押しとなったと思われる。担任をはじめとした教員にも、非常に協力的に行ってもらえたことができたと感じている。職員会議での、アンケートについての提案時には、教員から「記名式にした方が良いのではないか」という積極的な意見も出るくらい、前向きに検討する姿勢も見られた。

アンケート実施前には、不安要素ばかりが頭をよぎり消極的に考えていたが、実際にとりくんでみなければ、良いことも見えてこない、ということを実感した。

(2) 教職員が変わってきたと実感した！

職員会議で説明しているアンケートの集計表で、壁紙が破れている、清掃用具が傷んでいる、などの回答があった場合は、生徒指導の担当教諭や環境美化の担当教諭が、率先して確認してくれる場合がある。また、町職員(公務補・事務生)もアンケートの集計結果に熱心に目を通しており、軽微な補修を率先して行ってくれたり、町職員の経験から積極的に解決方法を考え、助言を与えてくれたりすることがあった。

このことから、アンケートのとりくみが教職員の行動も変化させるのだと実感した。

(3) 丁寧な提案が大切と実感した！

5.(3)にもあるとおり、会議での提案を簡単にしてしまったことが、アンケート回収率の低さにつながったと考えられた。アンケートに対する、こちらからの熱意が教職員に伝わらなければ、アンケートを行う理解も得られにくく、それが、アンケートの回収率の低さというものにつながると思われた。そのために、提案時には丁寧さを大切にしたいと実感した。

(4) 思いを新たにすることを決意した！

一番の懸念事項であった、アンケートにより要望が明らかになったとして、はたしてそれが

実現できるのか、という問題だが、残念ながら全てが叶う訳ではない。

生徒からの的を射る回答や、切実な要望を見ると、実現することができなくて、心苦しくなることもある。ただ「学校づくり」を進めていくうえで、「学校を知ること」「学校の主役である子どもの考えや想いを理解すること」は大切なことであり、それを踏まえたうえで、実現できるように予算要望等で、働きかけていきたいと考えている。

8. むすびに

今回この実践報告を作成するにあたり、結果として「まつだシート」は大変有用なものだったと感じている。研修における経過報告用として作成していたものの蓄積ではあるが、自分自身でも後から見ると経年でやってきたことが記録として残り、その時どのように感じ、どのように工夫してきたか、またどんな失敗をして反省したのかが、このシートを見ると思い出すことができた。

子どもアンケートにとりくんでから6年目となり、自分なりのスタイルやスケジュールも確立しつつある。しかし、今後も検討していく課題はあると考えている。壁新聞以外のアンケート結果の提示方法やアンケート情報の有効的な活用方法、また新たなアンケート質問内容など、これからも改良すべきことがあると思っている。

子どもアンケートを続けてきたのは、学校間連携による全員でのとりくみ、ということも、もちろんあるが、毎年何か失敗している、反省事項があるということも、とりくみを続ける原動力として、あるのかもしれないと感じている。

いずれにしても、今回は偶然にもブロック研修の資料提供の手立てとして「まつだシート」を使用することにより、自らのとりくみをふりかえてみた。その結果、常に自らがとりくみに学び、その学びがとりくみにつながっていたということに気づいた。また、このことは、とりくみを推進する上で、重要な要素であるということを確認したところである。

今後も、とりくみをふりかえりながら、すすめていきたい。